

第63回日本母親大会 in 岩手

生命を生みだす母親は生命を育て、生命を守ることをぞみます

北村裕子さん（女性部）

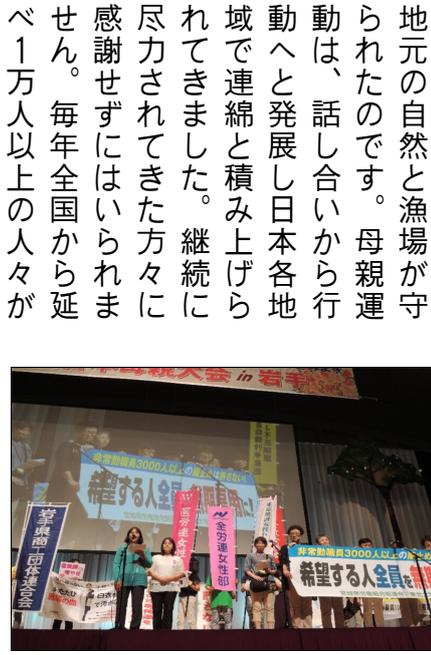
1955年から始まった日本母親大会は今年で63回目を迎えました。東北大学は3人参加し、1分間スピーチで無期転換の運動について頑張っていることを発表しました。

大会の歩みを読んで今年の開催地岩手に原発がない理由がわかりました。当時県知事は原発誘致に意欲的で田野畑村明戸地区が原発候補地となり、1982年3月には結果が出るようになっていました。村を守った女性のひとり元保健師岩見さんは、「原子力発電とは何か」の本を取り寄せて学び、村長と面談して「村民がやりたくないことはやらない」との回答を得ます。村

議員、漁協や農協に

も本を送って訴え続け、ついには環境庁からも「国立公園内に原発は作らせない」という言葉をひきだしました。女性や漁民の運動で地元の自然と漁場が守られたのです。母親運動は、話し合いから行動へと発展し日本各地で連続と積み上げられてきました。継続に尽力されてきた方々に感謝せずにはいられません。毎年全国から延べ1万人以上の人々が

希望者全員の無期転換を訴える東北大の参加者
8月19日20日



宮城県労連 第29回定期大会

非正規職員の大量雇止め問題を広く市民に訴える必要

高橋計介（農）

9月2日、東北大学職員組合からは、私と下山克彦さんが代議員として参加しました。大会冒頭の高橋正行議長の話では、仙台市長選挙での勝利をふまえて住民不在の村井

県政の打倒を目指すことが取り上げられました。

また、政府のいう「働き方改革」は「働き方大改悪」であることとを再認識し、最低賃金を引き上げることや、残業代ゼロ法案等を廃案にさせることなど、雇用環境の改善に取り組む決意が示されました。

質疑・討論の中では、数多くの問題提起や各組織の活動報告が示されました。私は非正規職員の大量雇止め問題における東北大学職組の取り組みと今後の方向性について発言しました。

8月に報道された東京大学の状況や宮城県内の他大学の状況に触れ、御しやすい大学が狙い撃ちされている可能性や、大学単独の取り組みでは力不足であり、広く市民に訴える活動の必要性をお話しました。

県労連女性部主催被災地バスツアー（9・16）

復興に力を

学生2名を含む19名が参加、東北大学から2名が参加しました。学生さんが写真を撮ったり、ガイドさんに質問したりとても積極的に視察をしていました。岩沼の希望の丘では、「あまりにも悲しくて涙も出てこなかった」とのガイドさんご自身の体験談を聞きました。また、瓦礫、瓦礫と言で言うがそれは一人ひとりの生活であり、宝物であること、その宝物を埋めて丘を作っ

たということでした。その丘には携帯電話と充電器があれば充電できる設備があることなど、体験したもののならでは多くの人の創意工夫で復興が考えられていることを知りまし



岩沼市立千年希望の丘（慰霊碑）



（女性部 京）